―話し方、応え方―

園長　家田　美里

六月も近づき、むらさき幼稚園も新学期のドタバタが少し落ち着いて来ました。毎年このドタバタの時期には卒園児のお母さんがボランティアとして助けてくださいます。その卒園児の年齢はと言うと小学生から社会人まで、実に幅広いお母さんたちに来ていただいています。私にとってとても懐かしい方にお会いできるこの機会は、この時期の楽しみになっています。お母さん達にボランティア依頼の電話をさせていただくと「嬉しい」と言ってくださり、ボランティアを終えて帰る際には「可愛かった、癒された」と言ってくださいます。

四月、入園式も終わり令和7年度が本格的に始まった頃。さすが『むらさきっ子』を育てたお母さん達です。泣きながら登園して来た子ども達を絶妙な空気感と距離感で落ち着かせ、ゆっくりと関わりそっと担任の元へ帰してくださいます。すると子ども達の表情が安心へと変わり遊び始める事が出来ます。そうなると次は友だちと遊び始め、遊びが広がり発展すれば遊びはどんどんダイナミックに。大人の「きゃー、やめてー」と言う声に反応するともう止まりません。

ある年の3歳児がロフトの上に色々なおもちゃをせっせと運んでいました。運び終わると今度は1つずつおもちゃをロフトの上から投げ始めました。誰かにぶつけようなどそんな意図はなくただ投げる事が楽しく、そこへ大人の「きゃー、やめてー」と言う声が入ればもっと楽しくなります。楽しいけれど誰かに当たってしまったら…さてどうしたものかと思った時にはもうボランティアさんが「投げるならこれはどう?」とフエルトで作った野菜を子ども達に見せてくださっていました。子ども達はしばらく考えて「いやー」と言ってみたり「いいよー」と言ったり、このやりとりも楽しんでから交換しました。流石ボランティアさん。「危ないからダメ」と止めるのではなく交換する事でこの遊びを続ける事が出来ました。そもそもロフトの上から物を投げる事が遊びですか?と問われたら子どもの世界では「遊びです」と答えます。子ども達は純粋に投げることを楽しんでいるだけだからです。「危ないからダメ」と言ってしまっていたら、子ども達は「遊んでいるだけなのになぜ?」と思っていたでしょう。周りの大人の対応で大きく変わりますよね。子ども達は新学期早々、たくさんの事に挑戦して、楽しさや痛みなど感じています。今は色々試している最中です。私たちはこの試しがたくさん出来るようにそっと見守っているだけです。

大人の対応、伝え方を考えていたら2年前の母の会講演会の事を思い出しました。この時の講師の先生も卒園児のお母さんで「話の聴き方」という演題でお話してくださいました。人の話を聴くという事の難しさや大人同士で話をする時の傾聴極意七ヶ条と話の聴き方を教えてもらったのですが、私が一番難しかったのが子どもの話の聴き方でした。「なんで?」と言う返し方は親も子どももしんどくなってしまう言葉だそうです。そこでテクニックとして教えていただいたのが

・オウム返し
・ポジティブ返し
・HOW返し

です。その言葉通りなのですが、ポジティブ表現へ言い換えましょうと言われた時に考えてみました。これが思った以上に難しく1つも思い浮かばないのです。気が弱いや泣き虫、飽き性、しつこい、せっかち、気性が荒いなどの言葉をポジティブ表現にしてみてください。…できましたか?私は全然思いつかず他のお母さんが言った言葉をメモするのに必死でした。返し方の違いで子どもを否定する事も攻める事もなく認めてあげる事の難しさを痛感しました。大人の概念で子どもに話をしていたら知らずに子どもを傷つけている時があります。もっと子どもの気持ちに寄り添い、子どもの目線で話をしていかなければいけませんね。ちなみに「気が弱い」→「優しい」、「泣き虫」→「感情豊か」、「飽き性」→「好奇心旺盛」などでした。他にも色々とあると思いますが、なかなか実践できません。私もまだまだ勉強中です。

